Ⅱ　厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）
分担研究報告書

２．東日本大震災で被災した知的障害のある人と家族の生活再建にかんする研究
第２報

研究分担者　吉川かおり（明星大学人文学部教授）

A．研究目的

研究期間全体を通しての目的は、東日本大震災で被災した、知的障害のある人と家族の生活再建支援策について、親の会および本人会活動との関係を含めて考察することである。２年目にあたる平成 25 年度は、知的障害のある人を対象とした個別ヒアリングと親へのグループヒアリングを実施し、本人の声を拾い上げると共に、家族の生活再建状況について継続的に把握すること、知的障害のある人および家族が避難所にいられる仕組みの構築方法について考察することを目的とした。

B．研究方法

１．岩手県・宮城県・福島県・茨城県で被災した知的障害のある人および被災者受け入れ地域で本人活動をしている人を対象に、個別ヒアリングを実施した。

２．H24 年度にヒアリングを実施した親の会を対象に、その後の生活再建状況および、避難所にいられる仕組みに関してグループヒアリングを行った。

３．全日本手をつなぐ育成会機関誌およびホームページ上で、「これがあれば落ち着けるグッズ」について情報提供を呼びかけた。

倫理面の配慮として、調査の概要説明および、情報を公開する場合には、事前に了解を得ることなどの確認を行い、了承を得てから調査を実施した。

C．研究成果

１．計 31 名にヒアリングを実施した。被災時および生活再建過程で適切な支援を得ていたため、主観的な困難さは低い傾向にあった。知的障害が軽度の場合にも重度の場合と同様の守られ方をしており、エンパワメントおよび災害時マンパワーの観点から、発揮しうる力の活用を考えていく必要性が明らかになった。

２．親ヒアリングからは、再建状況はあまり変わっていない様子がうかがえた。もともとあった格差がさらに開いているとも換言できる。再建過程に臨む際の重要な要素として、一般的な側面（住居等）以外に、子どもの状態、事業所の再開、および親自身の物事のとらえ方が強く影響していることが推測された。

３．個人または複数での話し合いの結果として、計６件の投稿があった。個別性の高さをどのように支援していくかが課題であることが分かった。

Ｃ．研究成果

１．知的障害のある人へのヒアリング

（１）目的

東日本大震災で被災した、主として知的障害のある人を対象に、避難時および生活再建の状況を調査することにより、現状と課題を明らかにする。

（２）対象

発災時に、岩手県Ａ市・Ｂ市・Ｃ町、宮城県Ｄ市・Ｅ市・Ｆ町、福島県Ｇ市・Ｈ町・Ｉ町、茨城県Ｊ市に居住し、震災による被害（事業所の閉鎖・自宅損壊・地域移動・避難）を体験した知的障害のある人。

上記の被害を受けた人を受け入れた地域で、知的障害者の本人活動をしている人。

（３）手続き

①全日本手をつなぐ育成会の下部組織である､県手をつなぐ育成会に依頼をし、事業所および利用者もしくは市町育成会の会員の紹介を受けた。

②全日本手をつなぐ育成会と、全国大会等を通して関係作りができている事業所に依頼し利用者の紹介を受けた。

③全日本手をつなぐ育成会と、全国大会等を通して関係作りができている本人に直接連絡をし、了承を得た。

（４）方法

調査者２名または３名（３名のうち１名は知的障害者）でチームを作り、ピアサポートの観点を取り入れつつヒアリングを行った。本人の希望に応じ、支援者が同席することもあった。

気持ちを適切な言葉で言い表せない場合を想定して、多様な表情および感情を表す言葉を印刷したシートを用意し、必要に応じてそれを用いて会話をした。

重度の知的障害のある人に対する調査方法を探るため、絵カードや写真を用意した。

（５）実施時期

2013 年 4 月～8 月

（６）結果の概要

①対象者

性別：男性 16 名、女性 15 名。計 31 名

年代：10 代１名（3.2%）、20 代 13 名（41.9%）、30 代７名（22.6%）、40 代５名（16.1%）、50 代４名（12.9%）、60 代１名（3.2%）。平均年齢 34.8 歳。

障害種別：知的障害 30 名、精神障害１名（自称）。うち、身体障害３名（重複）。

障害程度：軽度 22 名（71.0%）、中度４名（12.9%）、重度５名（16.1%。うち、ジェスチャーを含めた言語交流が不可だった者：１名）

②調査項目

属性、成育歴・職歴

震災前の暮らし（家族・友人および本人会、職場、支援者、近隣などとの関係）

避難していた時に体験したこと（大変なこと、良かったこと）

仮設住宅などに移った後の生活変化（困っている事、大切にしているもの、必要な支援）

今の暮らしの状況（満足度）

これからのこと（夢、やりたいこと）

障害理解の状態
③調査結果
　本人の持てる力を強めていく・力を発揮するチャンスを作っていく働きかけが必要であると判断した根拠となる言説および言説のまとめを列挙する。なお、言語および表情の絵等での会話ができなかった２名については、除外している。

＜被災した自分や仲間のことをどう思っているか＞ＮＡ６
○震災後、避難場所をいくつか経験した中で「私はどうしてここにいなきゃならないの？」「私はここにいる人間じゃない」と自問自答を繰り返していた。しかし、現在では当時を「毎日生きる努力をしていた」「自分で生きなきゃならなかった」と振り返っている。
○震災直後はあまりのショックにグループホームの部屋で、一人で何日も泣いてばかりいた。とくに仙台の友人の死を予感（結果的に生存していた）し「『もう会えない』と思うと心がぽっきりと折れてしまった」「友だちが下敷きになって「助けて」と叫んでいるかもしれないと思って、ずっと泣いていました」とのこと。
○テレビを観ることが好きで、一日のなかでもテレビを観ている時間が長かったことから、震災後の余震や放射能をめぐる情報の多さに辟易しているようす。また、福島に住む人が他県に避難していじめを受けていたり、福島に住む自分たちが一部で差別されていることに対して悲しく思っており、認識を変えてほしいと願っている。
○住んでいる街に対しては思い入れが強いようで、「やっぱりここがいい」と話している。原発問題についても震災直後はとても不安に思っていたが、現在は「その時ほど心配していない」と話している。
○本人が何度も「仲間」と語っていたように、信頼する仲間や支援者が近くにいることによって、震災や避難生活を自分の成長の糧にしていたようす。仲間との信頼関係が強まったことで、より生活の幅が広がり、本人活動にも積極的に取り組むようになった。全国の本人へ自分の被災経験を発表することで「前の自分にできなかったことができるようになった」「たぶん自信がついた」という言葉がそれを物語っている。
○市内が津波に呑み込まれてしまったことについて「津波で流されてしまったのだから仕方がない」と答えている。これだけではどういった心境か把握することは難しいが、困難な状況を何とか受け入れているようすは感じられた。
○生活の中心だった仕事がなくなったことで精神的なバランスを崩した（支援者談）ようだが、通所施設に通いはじめ、その後また同じ場所で働けるようになったことは大きかったと考えられる。本人から被災した経験に関する話は出なかった。性格的に前向きなので、「これから家を建てたい（災害公営住宅）」など目標を持ちながら、現在の生活には満足しているようすだった。
○幼なじみの友だちが津波に巻きこまれて亡くなったことをとても悲しんでいた。本人は明るく振る舞っているが、かなりのショックだったに違いない。本人はとにかく農業が好きで、農作物を作ること

が喜びと感じている。自分の家の農業機器や畑、田んぼは津波に浸かってしまったため、農業機器や田んぼを貸してくれた地元の人たちにとても感謝していた。
○２年半に及ぶ長い避難生活に辟易しているようす（顔マークで「落ち込む」、「もう嫌だ」を選択）だった。
○震災後から現在まで、大きな驚きとショックがあったようす（顔マークで「がーん」を選択）。
○現実的で、生真面目な性格だと語る。東日本大震災という未曾有の災害についても、後ろを振り返らず、前に進むことをモットーとしているとのこと。そのためか、被災したことに対しての弱音などは聞かれなかった。
○津波被害をギリギリのところで生き残ったため、実際に津波に呑み込まれた人を眼前に目撃し、また家族や会社の同僚も津波被害で亡くしており、ヒアリング中に涙ぐむことが何度もあった。記憶を時系列ではなく、断片的にしか思い出せない場面も多かった。障害告知を、震災後に受けたため、知的障害のある人たちとの仲間意識はないようす。
○作業所の仲間が一人亡くなったことを悲しんでいる。亡くなった女性はまだ若く、作業所のメンバーとお墓参りに行ったことを寂しそうに話していたのが印象的。
○震災からしばらく経ってから、市内の津波被害のあった地域に足を踏み入れたときに、「本当にあったんだな」としばし呆然としたことを話している。
○原発事故や放射能問題について「もしかしたらこの土地から避難しなくてはならないかも」（友人たちと離れなければならない）という想いに駆られた様子だった。
○津波から逃げたり、避難した先での経験はとても印象に残っているようで、何度も同じ話をする。一方で、避難している人のユーモラスな人間模様を表現し、悲惨さを感じない（思わず聞いている方が笑ってしまうような）伝達の仕方をする。
○津波被害を目の当たりにして、非常にショックを受けていた。自分の地元が津波に呑み込まれてしまった風景、鉄道のレールが曲がりくねったことなど、本人の生活空間に被害そのものが直撃した。また、自閉的傾向があるため、あらゆることを記憶しており、それを思い出す作業が辛そうだった。
○本人以外の家族が全員亡くなったことについて深い悲しみを覚えている。家族の葬式に参加できなかった（理由は不明）など、未だに家族の死別について整理がついていないと思われる。
○被災したことにより、仕事と住居をそれぞれ無くした経験は、とてもショックが大きかった。仕事も住居（グループホーム）も、共に新しくスタートしたが、震災前の生活と比較してしまうことが多く、なかなか現在の生活が受け入れられない。またそれがストレスになっていて、何とか受容・順応しようと頑張っているが、思うようにいかない現実もある。
○胸まで水に浸かった。育ちの良さからか、どちらかというと楽観的な思考の持ち主。大変な目にあいつつも淡々と経験を語ってくれた。避難生活も障害のある

人たちとともに不便さは感じつつも平穏に過ごしていたと思われる。
○自分のことを「前向き、明るい」と評しているためか、被災した自分自身について話をすることは少なかった。むしろ、震災後の避難生活の話題が多かった。
○母親を亡くしたことによるショックは大きく、ヒアリング中には大粒の涙をこぼす場面もあった。地震の揺れに対しても同じくショッキングな出来事として記憶されており、ヒアリング中は時折身体を揺らして当時の記憶を思い返していた。
○生活空間が津波被害によって壊滅的状況になったことで、住居、仕事すべてがリセットされる結果になってしまった。また、2012 年には親が急死するなど、心身へのストレスは甚大なものだったと想像できる。本人は、大切にしていた工場での仕事に復帰でき、また、当時の同僚 5 人が亡くなっていることも含めて、「せっかくもらった命」だから頑張ろうと思っている。

＜避難していた時に経験したこと。大変なこと・良かったこと＞ＮＡ３

○重い障害のある人との集団生活ではどうしても「重い障害のある人のリズム」が優先されてしまうため、当時を「よくストレスで爆発しなかった」と振り返っている。また、本人の望む生活を支援者に訴えても「仕方がない」という反応が繰り返されるため、最後はあきらめて訴える気も起きなかったとのこと。重い障害がある人たちが嫌いなわけではないが、「とても辛かった」と当時を振り返っている。
○震災直後は駅に一人でいたことから、群衆にまぎれて避難することとなり、「すごく怖かったけど、誰も知っている人がいないので『自分の身は自分で守らなくちゃいけない』と思って、泣きたかったけど、泣くのを我慢していました」と当日を振り返っている。
○避難先での暮らしは時間を持て余していたようす。いろいろなレクリエーションやスポーツなどのイベントがあったが、自分の部屋にテレビがないのがとてもストレスだった。しかし、その時のようすがＮＨＫで放送されテレビに映ったのが少しうれしそうだった。
○本震はもちろん、何度も続いた余震についても恐怖があったようす。水や食料の確保も大変だったと話している。
○ホールでの避難生活では「トイレが一番困った」と話しており、避難所から 20 分歩いたクリニックのトイレまで行かなくてはならなかった。「我慢したが限界だったので最後は一人で夜歩いてトイレに行った」と話している。震災後、電気の復旧が進んでいなかったことを考えると、真っ暗な中を歩いてトイレに行ったことが想像される。また、トイレに行きたい気持ちを周囲の人たちに伝えることができず、周囲もそういった配慮ができなかったと考えられる。
○関東方面での避難生活がとくに退屈だったようで、受け入れ側もいろいろと工夫してくれたが、総じて退屈だったと語っている。また、欲しい物も我慢していたとのこと。良かったことについてはとくに発言がなかった。
○信頼する仲間や支援者がいたことによ

って、避難生活はネガティブな経験にはなっていない。むしろ、共同生活をしたことによって仲間との関係がよくなりよかったと捉えている。
○震災直後は近隣の体育館に避難し、体育館のカーテンに包まって寒い夜を過ごした。その後は火葬場、高校、仮設住宅と避難生活を送った。風呂は週数回自衛隊の用意した風呂に入りにいくなど、不自由な生活が続いた。ヒアリングの中で「なじむ」という表現がたびたび使われたが、避難生活のなかでさまざまな新しい出会いがあり、その中で持ち前のキャラクターでコミュニケーションをとること（「なじむ」こと）で、本人もさまざまな刺激を受けたと思われる。
○尿漏れがあることから、避難生活中はおむつやパットがないことで困った。また、糖尿病の薬がなく、症状は出なかったが本人はとても不安に感じていた。避難所のトイレが水洗トイレでなかったため、慣れなかった。
○しばらく親戚の家に避難していたが、居心地はよくなかったようだ。避難してよかったことは、地元の人たちに畑や田んぼ、農業機器を貸してもらうなど、助けてもらえたこと。
○避難生活のストレスから、肩が痛くなって月 1 回通院している。また 2012 年には突発性難聴になり、現在は少し回復している。また、不眠症に悩まされていて、睡眠薬がないと不安で眠ることができない。救急車のサイレンの音を聞くととても不安な気持ちになる。
○震災後、お風呂とトイレに苦労した様子だった。お風呂は自衛隊が準備したものに入ったようで、支援者と一緒にお風呂に入った。避難所のトイレも狭く、汚かったようで、あまりいい印象はもっていない様子だった。
○震災前後は精神科の病院に入院していたため、震災直後はラジオしか情報源がなかった。母親は震災後に死去し、おそらく心身ともに疲弊したと思われるが、本人自身は自己防衛的に「嫌な記憶はすべて消去した」と話している。震災前に住んでいた貸家が津波で流されてしまったことから、その修理等の手続きや、それに伴う人間関係に苦労している様子。
○あらゆる避難場所の住環境に苦しんだ様子だった。特に仮設住宅は「足を伸ばすこともできなかった」「隣の洗濯機の音がうるさかった」「好きな音楽も聴けなかった」など不満が多かった。また、「新しく家を建てて引っ越そう」という家族共通の目標のなかで仮設住宅生活を過ごしていた。
○震災直後に同じ会社の同僚の自宅に泊めてもらえたことは、本人にとってうれしい誤算とも言える新しい人間関係における出来事だったようだ。本人もそのことをとても印象的に思っていることが伺えた。
○避難生活は近所の小学校に寝泊まりした 2 日間のみ。しかし、物資の不足が甚大だったことから、特に食料がなく苦労した。買い出しも混雑していたことからままならず、お菓子やお饅頭で空腹を凌いでいた。
○勤務先が 2～3 カ月休みだったこともあり、しばらく自宅にいるしかなかった。
○地震の揺れやお寺での避難生活に対す

る印象は、痛烈に残っている様子。そのなかでも、避難所の外で排便しようとした男性が転んでしまったことを面白がっており、何度もくり返して話していた。
○地震の揺れに対する不安感が強く、余震によってパニックを起こす回数も多かった。震災後、本人に合った仕事と出会えた（支援者が何度も試行錯誤して見つけた）ことで、精神的にとても安定し、仕事も好きになった。
○避難生活で大変だったことは、主に電気がつかなかったこと。食料等は問題なかった様子。震災前後で仕事の種類・内容が大きく変わった（以前の仕事でキャリアアップを目指していたが、諦めざるを得なくなった）ことで、気持ちの整理など苦労が多かったように感じられる。
○家族を亡くした。震災直後の避難所は非常に寒く、暖房器具は石油ストーブのみという状況だった。
○震災当日は、会社の人たちと小学校の体育館に避難し、次の日には庁舎で知人たちに再会してホッとしたと語っている。
○避難生活では、妹宅に住んだ 3 カ月間は気を遣う場面が多く、暮らしづらさを感じた。仮設住宅での一人暮らしでは心身ともにバランスを崩してしまい苦労した。現在はグループホーム生活で、今度、新しいグループホームに転居する。
○住まいの変化がたびたびあり、その時々で順応するのが大変だったのではないか。一方で、結果的には段階を経て、現在はグループホームに暮らし、本人もその生活を心地よいと感じている。
○避難生活のなかで、職を失い、一軒家で親戚と同居していた時期があり、「働きなさい」と言われたり、親戚の子に悪口を言われるのがとても苦痛だったと話している。一方で、人づてに自分のことを心配している親戚の言葉を聞いたこともあり、複雑な様子だった。

<現在の生活の満足度と理由>NA７
○75 点。理由：テレビで●●（震災前に住んでいた土地の名前）って見ると、ショックを受けるから。●●の友達も、見たくない（って言っている）。見るとムカつく。戻れないし。バリアゲート通れないし。桜も見られないから。今の●●の長が悪い。●●の長と話し合いがあって参加したときに、他の参加者が●●長に怒鳴っているのが怖くて涙が出た。
○95 点。理由：グループホームの世話人との関係が悪いことがマイナス 5 点。
○100 点。理由：とくになし。「がんばって『絆』を深めよう」とのこと。
○50 点。理由：一緒に住んでいるグループホームのメンバーと気が合わない。グループホームの担当職員が男性に変わってしまい、相談できなくなってしまったから。
○「かなりいいね」。理由：病院へ行くのは好き。今利用している通所施設ではひどいことをされない。休憩時間にやるゲームが楽しい。
○90 点。理由：以前と同じところで仕事をし、ジョギングや好きな床屋に行き、好きなハンバーガーショップに行けるから。
○100 点。理由：特になし。
○50 点。理由：早寝早起きが辛い。田んぼや事業所がもう少し近ければいい。人

間関係が苦手。職場の人たちとも仲が悪くないわけではない‐普通の関係。住むところがあり、田んぼもあるのがうれしい。
○94 点。理由：仮設住宅の部屋が狭い、自分の部屋がない。フィンガー5 が好き。
○50 点。理由：（震災後に同居を始めた）お母さんがうるさい。畑仕事が苦手。
○点数は付けられない。理由：ＮＡ
○50～60 点。理由：仮設住宅の環境がよくない。現在受けている支援はとてもよい。
○98 点。理由：うれしいことは「お昼にみんなと食べるお弁当の時間」
○80 点。理由：たまにいろいろと考えてしまうところがあるから。
○80 点。理由：職場で言いたいことが言えないから。亡くなった友人のこと。
○80 点。理由：もう社会人なのでいろいろなことをもうちょっと心配しないようになりたい（マイナス 10 点）。夢を現実にしたい（マイナス 10 点）
○100 点。理由：落ちついて生活しているし、トレーニングもしている。大好きな DVD も見ている。
○90 点。理由：今の生活は普通。
○70 点。理由：お店が遠い。自転車か歩いていけるくらいの場所に住みたい。近所付き合いが上手くいっていない。近所の人たちから白い目で見られている気がする。会社や近所で差別されることがある。職員が会社訪問してきて、それ以来、社員の目が変わった気がする。以前勤めていて震災で解雇された会社に再就職した仲間がいる。ちょっと悔しい。
○50 点。理由：給料を上げてほしい、休みがもう少し欲しい、市内の山の方に引っ越したい、結婚したい。
○100 点かな？。理由：人間関係がどうなるかが心配なときがあります。「どうしてそう思うの？」「どうしてそんなこと言うの？」みたいなことが起ります。震災前はグループホームの生活が慣れなくて、60 点くらいでした。一人暮らしのときは 25 点。妹の家にいたときは 10 点。現在は点数が上がっているところです。
○50 点。理由：母と二人暮らしなので、できる範囲のことは手伝ってあげたい。洗いものなどをしているが、これから手伝えるところを増やしていきたい。

２．親へのヒアリング

（１）目的

東日本大震災で被災した、知的障害のある人の家族を対象に、生活再建の状況を調査することにより現状と課題を把握し、家族向け冊子・マニュアルに掲載すべき事項を明らかにする。

（２）対象

Ｈ24 年度にグループヒアリングを行った親の会に所属している人。なるべく当時と同じメンバーを依頼したが、数名入れ替わっている場合もあった。
岩手県Ａ市５名、宮城県Ｂ市３名・Ｃ町３名、福島県Ｄ市５名・Ｅ町７名。

（３）手続き

当該の親の会会長に、調査趣旨を伝え、日程・場所・参加者の調整を依頼した。

（４）方法

３名から７名でのグループヒアリングを行った。

主な調査項目は、この１年～１年半の生活変化、ストレス発散の方法、避難所で知的障害・発達障害のある児者がいられる工夫について、自由に話をしてもらった。

対象者に心理的な負担が出た場合に備え、カウンセラー同席のもとに実施した。

（５）実施時期

2014 年 2 月～3 月

（６）結果の概要

①対象者

女性(母親 20・姉 1)21 名、男性(父親)2 名、計 23 名。

②結果

ヒアリングで語られた文言の中から、今後の成果物(マニュアル・啓発冊子等)作成に関連する知見をピックアップして掲載する。

○家さえ建てれば毎日が楽しくなると思っていたが、建てた反面、人との付き合いが減ってさびしい。こんな感じじゃなかった…と思う。

○いったん仮設住宅やアパート等に落ち着いても、台風が来るとか、部屋にカビがはえるとか、次々に災難が起こることがある。燃え尽きないために、70%くらいの入れ込み方がちょうど良いと思う。

○子どもが体調を崩すと、看病で誰にも会わずに１週間が過ぎることもある。

○業者は、障害者のことを知らない人が多いので、いちいち説明が必要（例：スロープのつけ方）

○重度の障害のある子どものショートステイが身近にほしい。

○沿岸部は、男性のヘルパーがいない(少ない)。利用者が土日に集中しすぎると、人手が足りなくなる。一方で、ガイドヘルパーは、利用者が少なすぎて廃止になってしまった。

○初期に優先枠で仮設に入った人たちは、４人で２Ｋの人もいた。後から入った人は２人で２Ｋのところもある。ベッドを入れると部屋がとても狭くなるので、よく考えてから応募した方がいい。

○（障害児者がいることで、周囲の目がとても気になるタイプの親の場合には、）障害者のいる家族の入る区画を持った仮設がほしい。避難所でも、一区画でいいので、周囲の目を気にしないでいられる場所がほしい。

○状況に応じた、仮設住宅の借り換えに応じてほしい。家族に要介護の人が出たので、空いている隣を借りたいと要望したが、世帯分離しないとダメと言われた。

○親の方が周囲に気疲れしてしまうので、一般の人と一緒に避難するのは無理だと思う。

○震災後に、知的障害のある息子(本来は人間が大好き)が言うようになった言葉は「バカにしやがって!!」だった。

○震災後の生活変化を、誰かのせいにしないと本人も落ち着かない。環境変化を母のせいにしたがる人も多い。その結果、母が当たられて辛い思いをしている。

○薬を本人が取りに行けない場合に、代理で受け取れる制度にしてほしい。

○何事も、自分で行動を起こさないとダメなのに、子どもがいたら動けない。行

動に移せるまで、保健師等が寄り添ってくれたらいいのに、高齢や児童のことでいっぱいで、手が回らない。
○家がなくなって大変なこともあったが、復興支援の製品制作を通して全国の人と知り合いになれたことが良かった。
○仮設は、住めば都。前に居た地域よりは、何をするにも便利。
○１Ｋに５人で住んでいた時、知的障害のある子どもはトイレに閉じこもっていた。その後１軒屋を借りたが、子どもがブツブツ言いながら歩くので、近所の人から、外に出すなと苦情が来た。その時は、さすがに辛かった。
○助成金を、広域での活動にも使えるようにしてほしい。被災者限定だと、利用者が限られて経営が成り立たない。
○身体障害者と知的障害者で、周囲の対応が違いすぎる。職員の人数も違いがある。知的障害はもっと手厚くしたほうがいい。
○子どものことを言われると、自分のことを言われるよりも辛く感じる親は多い。
○親としては、つい子どもに制限をかける方向でかかわってしまう（独り言を言っていると「シー」、窓を開けると「(丸見えになるので）閉めなさい」)。
○仮設では、周りに犬を飼っている人が多かったため、我が子のうるささは目立たなかった。
○趣味（手芸）に没頭できる時間ができた。作ったものを出品して評価してもらえるのが嬉しい。「●●ちゃんのママ」ではなく、「自分」でいられる時間が大切。
○この町の障害者は、ここへ避難してということを決めておいてもらえれば、必要なものを届けてもらえるのに。

３．これがあれば落ち着けるグッズ

（１）目的

知的障害児者と家族が、避難所や仮設住宅から排除される方向を自ら選択しなくて済むような方策を探す。具体的には、「これがあればわが子は落ち着ける」というグッズを探し、受容と供給をマッチさせる方策を考案すること。

（２）対象

親ヒアリングの参加者および、全日本手をつなぐ育成会機関誌『手をつなぐ』購読者。

（３）手続き・期間

全日本手をつなぐ育成会機関誌およびホームページ上で、「これがあれば落ち着けるグッズ」について情報提供を呼びかけた。2014 年 1 月～3 月まで受け付けた。併せて、親ヒアリングにおいても情報提供を受けた。

（４）結果

○阪神淡路大震災を体験した重度の知的障害者の親から：避難所では顔見知りの方がいたため、安心していられた。育成会関係の方は、校内で２家族だった。落ち着くグッズは、愛用のハンドタオル、任天堂ミニゲーム・３ＤＳ・スーパーマリオ、60～80 ピースのパズル、ブロック・積み木、ＣＤ（水戸黄門・遠山の金さん・六甲おろし・世界に一つだけの花・ちびまる子ちゃん・クレヨンしんちゃん・ドラえもん)、その日の新聞・広告、

画用紙・色鉛筆。いわゆる子どもたちが好む「おもちゃ」（絵本・図鑑・怪獣・模型）には興味なし。
○息子に聞いてみました。自分の部屋の椅子に座って、絵を描いたり音楽を聞いたりすると落ち着くとのこと、でも、一番は、お母さんの側だと。
○重度（区分５）の息子です。グッズが必要な状況は年代で変わっていきました。保育園の時はスーパーに置いてある冷凍食品などを入れる袋、風船。学校入学後はカセットテープ、小さいサイズの絵本。ふりかけ。小さいサイズの入れ物に入った醤油。ボールペン（バネが入っていて分解できるもの）、ゴマのドレッシングは、20代になった今でも好きです。Eテレ（災害時は被災番組ばかりで落ち着かなくて困りました）。お風呂には入浴剤とペットボトルが欠かせません。
○重度知的障害児（学齢）ですが、YouTubeを開き、自分で選択して見られること（iPadがベスト）。
○障害者が自分の居場所がはっきり分かる自分専用マット（座ったり横になったりできる）、タオル、ぬいぐるみ等その方の好きなものがあると安心です。障害者だけではありませんが、段ボール等で他の家庭との仕切りを作ることにより、障害者の家族も落ち着けると思います。
○育成会の支部会で話し合ってみました。＜多数意見＞チラシ、フリーペーパー、タウンページ、お中元・食料品・衣料品のカタログ。紙、塗り絵、筆ペン、鉛筆、サインペン、消しゴム、クレヨン、クレパス。小麦粘土、スライム。手回し充電器～ゲーム機、iPod、携帯電話で使用。イヤーマフ（iPod のイヤホンバージョン）。ＮＨＫ教育番組の映像（おかあさんといっしょ、いないいいないばあ、ぽっころりん）。あんぱんまんの映像。＜少数意見＞ひも・バンダナ・タオル・ハンカチ。バランスボール（空気を少し抜いてソファにもできる）。フワフワの毛布。組み立てて使用する一人更衣室。パズル・オセロゲーム。電卓。人物（本人）の写真アルバム。ほかには、会場にオルゴール（ＣＤ）の音楽が流れていたら落ち着くかも…という意見もありました。
○アニメのＤＶＤ、好きな音楽のＣＤ。
○ＤＳゲーム機。
○ちぎる広告とちぎらない広告があった。演歌が好き。
○同じ施設を利用しているお気に入りの利用者にスリスリすること。
○一人遊びが好きで、カタログをめくっているのが好き。
○ビーチボールで遊ぶこと、ピアノ（カシオトーン）をひくこと。
○ベルト・ストラップ・ひも等を手に持って振り回すのが好き。スペースさえあれば、１人でいられる。穏やかな曲調の音楽が好き。
○童謡が好き。カタログも好き。
○かつお節の袋が大好き。
○温かいご飯。
○皆とワイワイするのが好き。携帯・PCをいじること、カラオケが好き。
○一人きりになれる空間。

　このような個別性の高さを、親の会ネットワークでカバーできるような仕組みづくりが必要であることが分かった。